
貴方と詠う鎮魂歌。

泉 菖蒲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方と詠う鎮魂歌。

【Nコード】

N6200M

【作者名】

泉 菖蒲

【あらすじ】

人は私を呼ぶ。

美女の皮を被った女狐だ、と。

あるものは噛い。

あるものは卑下し。

またあるものは私に深い嫌悪の念を抱きながら。

人は呼ぶ。

ネヴァーランス国、第二十七代皇帝、アルシオン・リーフ・ネヴァーランスの暗雲たちこむ後宮に住まう数ある側室の一人であるこの

私、こと、レイティア・ティーン・コンフォートを、人々はそう呼んだ。

登場人物紹介（前書き）

随時更新していきます。

登場人物紹介

レイティア・ティース・コンフォート

白金の髪に深緑の瞳を持つ美しき今は亡き亡国の皇女。14の時、ネヴァーランス国第二十七代皇帝の側室となる。

アルシオン・リーフ・ネヴァーランス

ネヴァーランス国第二十七代皇帝。天才的な武の才を持ち、武王として数々の戦で名を誇る。銀髪碧眼で野性的な美を持つ。

ユーコ・ミナガワ 本名…皆川 優子

学校帰り突然異世界へと迷い込んでしまった16歳の少女。黒髪黒目。森をさ迷っていたところ偶然アルシオンと出会い恋仲になる。

ミリア・アルバート

レイティアの現侍女。ユーコ・ミナガワの専属女騎士だったが、主を害したとされるレイティアの動向を探るため侍女として行動する。金髪蒼眼の美人。

ノイ

数年前突如として現れ常にアルシオンの傍らに居る黒いフードを被った謎の男。

彼の人

後宮に住まうレイティアの元を夜な夜な訪れる男。艶やかな黒髪に紫闇の瞳を持つ。

ミシエル・ハイン

レイティアの乳母兄弟であり、唯一祖国から共に来た侍女。燃えるような赤髪に優しい茶色の瞳を持っていた。ユーコに毒を盛った犯人として拷問された後殺される。

第一話（前書き）

突破的に頭に浮かんで書いてしまった作品。王様に愛されるヒロインを虐めるべく登場する側室さん。そんな数ある側室さんの一人（王様に興味なし）に視点を置いて書いて見たんですが…どうでしょう。

第一話

人は私を呼ぶ。

美女の皮を被った女狐だ、と。

あるものは噛い。

あるものは卑下し。

またあるものは私に深い嫌悪の念を抱きながら。

人は呼ぶ。

ネヴァアーランス国、第二十七代皇帝、アルシオン・リーフ・ネヴァーランスの暗雲たちこむ後宮に住まう数ある側室の一人であるこの私、こと、レイティア・ティーン・コンフォートを、人々はそう呼んだ。

「ねえ、ミリア。私はいつになったらこの狭い部屋から出られるのかしら？」

この質問をするにはもう、何度目になるのだろうか。

冷めて味が落ちた紅茶を置き、小さな窓枠にちらりと目を走らせながらレイティアは本日三度目となる質問を部屋の片隅にひっそりと佇む侍女に尋ねる。

「――…皇帝陛下が貴方のあまりにも下賤な行いに対し許す、とはっきり申しあげられない限り、貴方はこの部屋から出ることを許されないでしょう。」

すると彼女は、まったくの無表情で――

しかし、その深い茶色い瞳に隠しきれない私への嫌悪を浮かべて、同じ答えを返した。

「いやあねえ、貴方も私がユーコ様に毒を盛った犯人だと疑っていらっしゃるの？」

「さあ、私はそのことについて何も存じておりません。」

「困ったわあ、私は本当になにもしてはおりませんのに。」

「ならばお静かに、我が城の優秀な憲兵たちがユー子様には毒を持った薄汚い犯人を突き止めるまで：ごゆるりとその部屋でお待ちくださいませ。」

そして話し終わると同時にむつつり口を噤んでしまう。

——本当に、困ったわ。

レイティアは相手に分かるか解らない程の小さな溜息を薄く形の良い赤い唇から漏らすと四つに分断された空を仰いだ。小さな窓枠にきっちり嵌った固く太い鉄格子がキラリ、南の空に上がった太陽の光を受け、鈍く鉄色に輝いた。

人は美しい物語を好む。

七日たって、ようやくあの狭い部屋から開放されたレイティアは、こちらに向かって険しい瞳で苦々しく睨んでくるこの国の主に向かってにこやかに微笑んだ。

「陛下、ご機嫌麗しゅう」

途端、彼の前王妃に似て美しく端麗な顔が醜く歪む。

「麗しゅう訳なからうこの女狐が。どうやって侍女をあそこまで仕込んだ？」

「……何のことでしょうか？」

「とぼけるのもたいがいにしろ!!」

「陛下ッ!」

身に覚えの無い彼の言葉に、レイティアは首を傾げる。

すると彼は、止める臣下達の声を無視し、乱暴にレイティアの胸倉を掴みあげると彼女の細い身体を勢い良く床の石壁に叩き付けた。レイティアの息が一瞬詰まる。

「今本当のことを吐くならば極刑だけは許してやる。さあ、吐け!!」

「……っ!!」

美しい白金の髪を無遠慮に掴みレイティアの顔を無理に上げさせ激しく上下に揺さぶる理不尽な男の顔を涙で霞んだ向こう側に見ながら、レイティアは唇を噛みしめる。

「陛下ッ!」

「アルシオン様、落ち着いてください!!」

「吐けッ!! ユーコの食事に毒をもったのはお前だな?! そうやるよう、お前がああ侍女に命じたな?! いい加減口をわったらどうだ?!」

パン。右頬に強い痛みが走った。

ようやくやんだ身体の揺れに恐る恐る男を見遣ればどこまでも冷たい青い瞳がただ啞然と床に座り込むレイティアを見ていた。

「……」、次は決して無いと思え。ノイ、その女を連れて行け。」

「はい。」

まるで一夜の嵐だ。

つい先ほどまでには確かにその端正な顔の上に合ったレイティアに対する激情が、まるで嘘のように落ち、酷く冷静な口調で唯一黙って静かに彼の傍につき従っていた黒いフードを被った男に命じると、彼はその身を翻した。

突然その場を去ったこの国の王に慌てて臣下たちが彼の後ろをつき従う。後に残された二人は、一瞬にして人氣がなくなってしまった広い廊下の真ん中でただ静かに見詰め合った。

「ティア…、」

ようやく戻った後宮の、一番はしにある己の部屋に入るとレイティアは、彼女の身を心配して出てきた侍女たちを慰め、部屋の奥にあるベットに身を投げるように横になると、そのまま闇に抱かれるようにウトウトと目を閉じた。

そして、何時間かしてレイティアは、暗闇で静かに彼女を呼ぶ甘く低い声音にゆっくりと目を開け、身を起こした。

「————…っ、」

相手の名を呼ぼうと口を開こうするが、突如走った右頬のチクリとした痛みで静かに口を閉ざす。

「良い、何も話さないで…… 右頬、まだ痛むかい？」

彼の人の顔を見て何も話せないことに少し悲しげに俯いていたレ

イティアだが、赤く腫れた右頬にふと感じた彼の人の冷たい手の熱に嬉しげに目を細めると次第に引いていく頬の痛みに彼女は小さく首を振った。

「ありがとう、もう大丈夫よ」

「良かった…」

その様子を見て、心底ほっとしたように今まで止めていた息をつく彼の人の様子にレイティアは小さく笑った。

「笑うこと無いだろ、本当に心配したんだ……見た瞬間、ボクの心臓が止まるくらい…」

「だからよ。貴方が私のこと心配してくれて凄く嬉しいの。」

「そんな、当たり前じゃないか」

「ふふ、だって私いまやこの国で一番の悪女よ？」

「そんな——、ティアは何も悪いことなんて…」

「でも皆、私がやったって思っているわ。突然現れた異世界の娘に陛下の寵愛を盗られたことが悔しいんだろう、って。そんなことあるはずも無いのにね……。あの娘の部屋に死華や動物の屍骸を贈ったのも私のせい、あの娘の着るものをズタズタに引き裂いたのもあの娘の侍女に嫌がらせをしたのも私のせい、そして挙句の果てにはあの娘の食事に毒を盛ったのも私のせいにされるんだもの…」

「ティア…」

「私を信じてくれるのは私が国から連れてきたたった一人の侍女と、貴方だけよ…」

レイティアの新緑の瞳から次々と溢れる涙を、彼の人は優しく指

先で拭う。

「いまや吟遊詩人が語るアルシオン陛下の詩の中で私は、神より使わされし異世界の乙女と王の愛を邪魔する悪女として登場しているでしょうね…」

「…ティア、」

その言葉を口到下途端レイティアは空しくなった。

彼女の感情を汲み取り、何も言わずただぎゅっ、とレイティアを抱きしめてくれる彼の人の身体に身を預け、目を閉じた。

第二話

ことの始まりはそう、今から五年前。

まだレイティアが何も知らず、夢のような幸せな日々を謳歌していた時のことだ。

たった一人の男の野望が、レイティアの人生を悪夢へと捻じ曲げた。

レイティアはふと目を細め、昔を懐かしむように部屋の窓際に置かれた小さな花瓶に目をとめ、そこで悠然と咲く一輪の赤い花を眺める。そして呟いた。

「あの頃は幸せだった……。」

目を閉じれば五年経った今でも鮮明に思い描くことができるレイティアが少女時代を過ごした美しき祖国の風景。幸せな日々。

小国ながら自然豊かなレイティアの国は、豊穡の女神にもっとも愛された国と詠われるほど肥沃な大地が広がり、温暖な気候も手伝って人々が食うに困ることなど滅多に無かった。

国中のあちこちに笑い声が溢れこの国に訪れた誰もがまるで夢のような国だ、と感嘆するレイティアの誇り高き祖国。

優しい両親、優しい兄弟達。このままレイティアも、幼い時から愛する婚約者と共に、この国で平穏に生きていくと思っていた。

——だが、

そんなまだ幼い少女の夢を呆気なく、粉々に砕いたのは隣国からのたった一枚の手紙。

「私が、私たちが、いったい何をしたというの…」

微かに震えを帯びた彼女の声は喉から滑り落ちた途端、直ぐ様空
気の中へと掻き消え、シーンと静まり返った広い室内にただ空しく
響いた。

その時のレイティアが望んだことはただ一つだった。美しき祖国
への永久なる平和。ただそれだけ。そのためならば、レイティアの
胸の奥に宿る熱い婚約者^{カレ}への想いなど……多くの者たちの命を前に
すれば、犠牲にしても構わなかった。

平気だった。

けれど…。

「何も、なにも、私は、私たちは、何もしていない。」

永世中立の概念を掲げる祖国は、他国同士の戦を避けるため人質
の代わりとして国唯一の皇女、レイティアを隣国、ネヴァーランス
国へと贈った。そうすれば全て丸く収まると、この国にやってきた
ネヴァーランス国の使者に言われ。たかが数ある小国の一つでしか
ないレイティアの国は、現在大陸中のありとあらゆる国を震撼させ
ているあまりにも巨大な力を持つ大国を目前としてただ従順に従う
しか他に生きる道は無かった。

しかし、レイティアの国は無残にも生きる道を崩された。

ネヴァーランス国がネヴァーランス国の北に位置する大国、イザ
ベル国を二年に渡り侵略し終わると、レイティアの国をあっ、いう
間に地図上から消してしまったのだ。

「…ああ…」

ポロリ。涙が一粒、レイティアの美しい新緑の瞳から流れ落ちた。

亡き小国の皇女であるレイティアには今やもう、その小さな可憐な手の中にはなにも残されてはいなかった。唯一、一人だけ連れ回ることが許されたたった1人の侍女であり乳母兄弟でもある彼女、ミシエルも、つい先日陛下が寵愛していると言う異世界の少女の食事に毒を盛った犯人として弁解の余地も無く無残に殺され、この五年でようやく馴染むことが出来たこの国の心優しい侍女たちは、一人残らず全く顔知らぬ侍女へと変えられた。

「…：帰りたい…」

愛する者を、愛する祖国を、一瞬にして奪われてしまったレイティアにはもう、この何もないただ広い部屋で嘆き、泣くことしか出来なかった。

女は無力だ。

レイティアは強く唇を噛みしめた。

何も、何も守ることが出来ない。守ることが叶わない。ただ男の庇護下の下、感情を殺し人形のように、情婦のように生きるだけ。

もし、私が男だったならば……

レイティアは叶わぬ夢を見る。

父や兄を助け、潔く祖国の為に戦場で命を散らすことができたのに……。

レイティアが後宮の庭を歩けば、様々な女達の悪意ある視線が体中に突き刺さった。

「ねえ、先日の事件の話しお聞きになりました？」

「あら、なんのことですか？」

「あら知らないの？なんでもあの方、只今陛下に一番のご寵愛を受けていらつしやるユーコ様に毒を盛ったとか……」

「まあ、なんてことを……」

「嫉妬に狂った女は醜くて嫌ですわねえ。」

「でもしうがありませんわよ。陛下のご寵愛を得ようとあのように必死に美しく着飾って待っているにも拘らずもう五年も音沙汰なしですもの。」

「あらそうなの、よっぽど女として無能なのね。」

「そうね。おほほほほ」

レイティアの姿を見た途端、まるで灯りに群がる毒蛾のようにヒラヒラ彼女の近くに現れては何かしら毒を零して去っていく妖艶な女達。そんな彼女達の背を無感情に眺めながらレイティアはここでの唯一つの楽しみである庭の花さえ、愛でることもままならない現状に思わず重い溜息を零した。

気が狂いそうだ。

いや、むしろできることならば狂いたい。

レイティアの後ろでは、まるで影のように一定の距離を保ち付き従う監視役の侍女がいる。少しでも彼女の目から見て怪しい動きをすれば、瞬く間にあのただ広いだけの寂しい部屋へと連れもどされてしまう。この前など庭の花を摘もうと身をかめた途端、地面へと伸ばした腕を勢い良く捻り上げられた上、謝罪もなしに元居た部

屋にまる一日軟禁されてしまったほどだ。

「一…息苦しい…」

クスクス、クスクス。レイティアを嘲笑^{ワラ}う愛に狂った女達の歪んだ囁きを聞きながら、レイティアはゆっくり、天を仰いだ。

昔と何一つ変わらない、蒼穹の空を見上げる。

大丈夫、一…まだ私は… 大丈夫。

今にも死神の裾に縋りつきそうになる弱い自分を叱咤するように彼女は胸内で何度も呟いた。

皇帝がもつとも愛する女、ユーコ・ミナガワ。

噂では神より使われし異世界の少女、いや聖女である、などと…まことしやかに後宮に勤める侍女達の間で囁かれているが、実際彼女に一度たりとも会ったことが無いレイティアにとってその噂が真実かどうかなど分かるはずも、ましてや後宮から一生出ることが叶わない彼女に調べられるはずも無かったし、興味も無かった。

故にレイティアは、後宮の余計なことには口を挟まず、他の女たちが嫉妬に身を焦していた時もただ黙って、代わり映えの無い日々をその小さな箱庭の中で過ごしていた。その筈なのに。

「濡れ衣もいいところだわ…」
「一…っ！」

思わず零してしまった言葉に目の前の少女の肩がビクッと怯えたように揺れた。いつの間にかウルウルとレイティアが何もしないにも拘らず、まるで少女を虐めた悪者のように、涙で濡れた黒い瞳でレイティアを見上げ、愛らしい上目遣いで見つめてくる…まだ女と呼ぶには幼い、珍しい黒髪の少女の姿に、レイティアは呆れたように首を振り、出そうになった重い溜息をグツ、と飲み込む。

そしてこの、神の悪戯とも思える噂の少女との邂逅に胸中で頭を抱えた。

第三話

女の幸せとは何か。

「一：っ、：あ、っ、」

「あら：御機嫌よう、本日は良いお天気ね。」

それはまるで、化け物でも見たかのような顔だった。

レイティアの姿を見た途端、まるで石像の様に顔を青ざめピタリとその場に固まってしまった黒髪の少女。いったい後宮の侍女たちにレイティアがどのようなにして語られているか。一目で分かる姿だった。

噂ではどんな人に対しても物怖じの無い素直な心を持った少女だと聞いていたが……。

レイティアは自分に微かな怯えを見せながらも強い眼差しでこちらを見る少女の姿に啞う。

やはり彼女も“女”、だと。

「華が良く映える素敵な日だとあなたもそう思わない？」

「あっ、：、」

「こんな日はお庭でお茶会なんてするのも楽しいわよね」

「一：、」

「ああ、そういえば去年は：イザベラ様が陛下に頼んであの木の下でガーデンパーティーを開いて下さったわね」

「一：っ！」

「陛下もご参加なさっていて——とても楽しそうだったわ」

「!」

もちろん陛下では無くイザベラ様が、だけどね。

ニコリ。もはや真っ青となった少女に向かってレイティアは柔らかに微笑む。

レイティアの一言一言に怯え、追い詰められた兎の様に無垢な反応を見せるまだ女の強かさを知らない少女の姿が可笑しくてたまらない。

レイティアを見つめる闇の瞳は、まさしく“女”であるというのに。

「……あ、あの……」

「ユーコ様、お下がりください。」

「ユーコ様、この者の言葉など……決して耳を貸してはなりません!」

時が止まったようだった。

レイティアの言葉を聞き、ただその場に啞然と佇むまだ女と呼ぶには幼い黒髪の少女。

先ほどまで鳴いていた鳥の声がやみ、気づけばその場に静が訪れていた。その場に居た誰もが暫くの間口を閉ざし一瞬にして訪れた“静”が過ぎ去るのを待つ。そしてそれはレイティアの小さな笑い声と共にその場から消え去った。

「あら、嫌ねえ。それではまるで私が嘘をついているようではないの。私が言っていることは真実よ^{ホントウ}」

「え……」

「ユーコ様! 耳を貸してはなりません!!」

「レイティア様、これ以上のお言葉は慎んでいただきましょう。本

日のことは陛下にご報告させていただきます。」

よろよろと後ろに後ずさる黒髪の少女を守るようにすぐさまレイティアの前に現れた侍女たち。

「どうぞご自由に？」

そんな彼女たちにレイティアは浮かべた笑みを更に深めるとゆっくり、少女の脇を通り過ぎた。レイティアが少女に近づいたびりぴりとした殺気が、目の前の侍女二人以外にも庭のありとあらゆるところにあることを知り改めて少女の存在価値の高さを知る。

よほど、愛されているのね。

庭の奥のほうで、木の枝を手入れしながらもレイティアを時折鋭く睨んでくるわりと親しかった庭師や木の間に身を潜めこちらを警戒した様子で睨む騎士達。すぐ近くの建物の二階からは窓を拭く振りをしながらもこちらの様子をしっかりと、どこか探るような冷たい眼差しで見つめている複数の侍女達が黒髪の少女を見守るようにいた。

「異世界の少女、か……」

少女の背から離れれば離れるほど、次々となりを潜めていく人々の目にレイティアは深緑の瞳を横にずらした。

レイティアの横後ろには未だ彼女を殺気こもった冷たい眼差しで……本人は上手く隠しているようだが女だらけの魔窟に五年も住まうレイティアにとって相手の気持ちを見抜くことなど酷く容易い――見てくる侍女が一人いる。

この前の急激な侍女総入れ替えの時に突如現れ、レイティア付の

侍女となった女だ。

詳細は伏せられているが恐らくレイティアを監視するため王より派遣された女騎士だろう、とレイティアは踏んでいる。

なんせレイティアの直ぐ後ろを彼女が歩いているというのにも関わらずカツカツという女独特のヒールが床石を打つ足音が、いつさい聞こえないのだ。

いくら侍女のヒールが後宮にその身を置く姫たちに比べ低いと言っても、床石を踏む足音がしないなどと……普通、よほどの訓練を受けたものでは無い限りありえない。

——窮屈だわ。

たった一人の男の為に、この小さな楽園に閉じ込められ、いつ己が愛でられるか……ただそれだけを楽しみに、生きがいに、夢に、明日を生きる愚かで賢い女たち。

一人の男以外愛することを許されず、一人の男以外その存在に価値を見出すことを許されない後宮^{コゴ}に住まう美しき醜悪な女たち。

万が一の確率のため、日々己を着飾り、己を磨く女たち。

ある者は家の繁栄の為に、またある者は国の存続の為に。様々な思惑と感情の糸が複雑に混ざり、絡み合い、今この場にある女達。

異界から来たと言う少女はこの後宮^{セカイ}を見て何を感じただろうか。

驚き？悲しみ？戸惑い？嫌悪？

——…否、

「……嫉妬、かな。」

レイティアという存在に怯えながらもこちらを毅然とした黒い眼差しで見た少女。

少女の闇のように黒い瞳の奥にはあの時確かに暗く揺らめく炎があった。

「ねえ、女の幸せとはいったい何だと思う？」

厳しい監視の目をかいくぐり、暗闇の中悠然とレイティアの前に姿を現した愛しき彼の人を両腕で胸に迎え入れながらレイティアは耳元でそっと囁いた。

「さあ…どうだろう…」

「こうして男に愛されることかしら？」

「それなら今、ティアは幸せ？」

「どうかしら…。そうね、月に数回、陛下から承るまるで意味の無い宝石の数々を貰い受けるより貴方の傍に居るときのほうが嬉しいし…心が酷く安らいで胸の隙間が埋まったみたいにとっても暖かくなるのよ。これは…幸せなのかしら？」

「ボクもだよ。君の傍に居るとボクの全てが満たされて…とても気持ち良いんだ。君と居ることがボクの一番の幸せだよ。」

ギュッと、互いに強く抱きしめあう。

普段より少し早めな鼓動が、彼らの両胸で大きく脈打った。

「でも…それは私の観点であって女の観点では無いわね…」

「そうだね。ボクのだって男の観点ではないけど…幸せに男も女

も関係ないんじゃないかな？」

「そうかしら、政や剣を振り回し弱き者である女や子を助けることが男が男である所以であってそれこそが男の幸せではないの？」

「クスクス、少なくともボクは違うな。そんな頭の固い昔の馬鹿な連中が己の権威を守るために言う虚言にすぎないよ。男とか女とか関係ない。人が人である限り、いや、例え人でなくとも、幸せなんて個々それぞれさ。」

彼の人の笑いがレイティアの胸に響いた。

「例えば？」

「そうだねー…、例えばさっきティアが言った陛下から承る宝石の話し。もしその宝石をティア以外の人が貰ったら凄く嬉しいかもしれないよ。男も女も関係なく。皆、陛下を愛しているからね。嬉しすぎて幸せかもしれない。」

「そういうものかしら？」

「そういうものだよ。幸せなんて本当人それぞれだよ。おいしいものが食べられれば幸せ、お腹を満腹にできれば幸せ、綺麗な服を着られれば幸せー…とかね。」

「ならその全てを満たしているにも拘らずそれらに幸せを感じることはできない私は高慢かしら？」

「見る人にとってはね。ー…でも覚えておいて、少なくともボクは違うから。」

そつと身体が離れる。

「楽園に居る者の全てが全て、幸せだとは限らない。そのことをボ

クは知っている。」

レイティアは目を閉じた。

「また、それと同じくらい楽園で幸せに暮らしている者の存在も。」

そして惹かれるように顔を上げる。

「でもボクは、ボクの幸せのためにその楽園を壊そうと思う。」

藤色の優しい紫闇の瞳と美しい深緑の瞳が重なった。

彼の人の瞳に写る自分の姿をレイティアはうっとり見つめた。

「ティアは楽園を壊す罪深きボクを許してくれる？」

「一…もちろん“ ”」

互いにクスリと笑いあい、軽いキスを繰り返し一…彼らは、深い深い、夜の闇へと堕ちていった。

第四話

あの黒髪の少女と他の女達の違いは一体何なのか。

黒髪の少女、ユーコ・ミナガワがある日突然この国に現れて一月が過ぎた。

そう、彼女が現れて一月、たったの… 一月。

レイティアは壁際に置かれた鏡付き机の前に座るとジッと正面を見た。病的なまでに肌白い女が、レイティアを無表情に見つめる。そして笑った。

「…私たちと彼女では何が違うのかしらね？」

レイティアは口端を吊り上げ不恰好に笑う彼女に問いかける。

「容姿、家柄、性格、人種、能力…」

夜空に輝く月のように艶やかな彼女の髪がレイティアの問いにサラリと横に揺れた。

「どれをとっても…特に秀でているところはなし…けれど愛される。」

王に、国に、自然に、世界に、神に。

「理不尽ね。」

少女もレイティア達と全く変わらぬ人間であるにも拘らず。黒髪の少女は愛された。

国中に蔓延っていた疫病は黒髪の少女が現れて以来いつのまにか消え去り、毎年この月に起こる深刻な日照り問題も嘘のように無くなり、去年までからからに乾き他国から“死んだ大地”^{ロストライフ}と侮称された大地は、ふと気づけばあたり一面美しい緑で覆われる肥沃した大地になった。

あれほど人が神に願い、出来る限りの努力をし、長い年月の間いったいどのような死にた死した大地を変えることが出来るのか、研究に研究を重ね続けてきたにも拘らず。たった一人の少女の存在がこの国の全てを変えてしまったのだ。

「本当、理不尽。」

そして、少女が来てからというもの今まで王の義務として後宮^{ゴコ}に訪れていた王は、黒髪の少女が現れて以来、一度たりとも後宮の女達の下へは訪れなくなった。

黒髪の少女も女であり、この世に生きる人間になんらかわり無いのに。

後宮に住まう賢く美しい女たちの決死の覚悟も、必死な努力も――
：運命を紡ぐ神は嘲笑^{アザワラ}うように残酷な糸^{ミライ}を紡ぎ続ける。

人は所詮、神の前では、運命の前では無力なのだと、無意味な人の抗いを楽しむように。まるでそれは初めから決まっていた出来事のように。

神より使われし異界の黒髪の少女は幸せを運んだ。
それが偶然にしろ、真にしろ。

黒髪の少女はこの国に住まう多くの者達から奇跡を起こした神子、または聖女として、愛され、崇められ、この国に、王の傍らに存在し続けた。

黒髪の少女は喜んだ。己が存在するだけでこんなにも人に喜ばれ

たことなど、今まで全く無かったことだからだ。

しかし、少女がこの国の多くの人々を幸せにした裏で、それと同じくらい多くの人々を不幸にしたなどと…表の顔しか見ることが無い少女は知らない。

運命の齒車はたった一人の存在により大きく歪み、動き出す。

そして、たった一人の存在により回ることが無くなった齒車たちは…一斉に壊れだす。

これはほんの序章の出来事。

「あれは…この世を滅ぼす魔女なのだわ!!」

深夜、後宮の中庭で大きく騒ぎ立てる女が居た。

「今すぐ、今すぐ、あの女を殺さなければこの国は、この国は!!」

とある女の悲痛に満ちた金切り声が後宮に住まう王から忘れ去られた女達の耳を強く刺激する。

「…いったい…?」

あまりにも不穏な言葉の羅列に、レイティアは思わず背筋を震わす素早く身を起こし寝巻きの上に薄紅色の薄いシヨールを着ると外に出た。

途端、ミリアという名の侍女らしかぬ鋭い眼差しをした侍女と出

会うが、レイティアは彼女が止める暇も与えず未だ女の叫びが続く庭へと足を向ける。

そして、ようやく着いた庭で多くの者達に囲まれながらも何事かを必死に叫ぶ女の姿に目を見開いた。

「…アマンダ…？」

信じられない光景にレイティアは自分の目を疑う。

「離しなさい、離しなさい！！今すぐ陛下に、私の陛下に会わせてえ！！！」

「アマンダ様、どうか落ち着いてくださいますえ！！！」

「アマンダ様っ！！！」

「魔女が、魔女が、魔女がっ！！！」

「アマンダ様！！誰かつ、誰か！！！」

「アマンダ様、お気を、お気を確かに！！！」

「私の、私の陛下、陛下、陛下があああああああ！！！！！！
魔女、魔女、黒髪の魔女にiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！」

その場に居た誰もが、ただ一人の女の狂行をただ啞然と見ていた。
後宮に住まい、今訳も無く泣き叫んでいる女の人柄を良く知る者達から「何故…」と驚きの声が漏れる。

「アマンダ、どうして…」

そして、レイティアもその一人だ。

レイティアと異なり、この国の4大貴族の一つ、アイスバルク家出身の彼女、アマンダ・アイスバルクはその類稀なる知識と美しさ、

そして気性の良さから、現代の王に一番最初に見初められ後宮に入った一番古参な女だ。

どんな女が後宮に入ってこようと決して目くじらを立てず、どんな人に対しても穏やかに優しく、礼儀をもって接する彼女は後宮^{コウ}に住まう女たちでさえ「彼女ならば…」と納得し喧嘩するのも馬鹿らしい、と思うほどの人格者であり、黒髪の少女が来るまでこの後宮の誰もが認める一番の王の寵姫だった。

しかし――――。

「ああああああ、陛下、陛下、何故、何故なのです?!」

「アマンダ様っ!!」

「アマンダ様っ!!」

まるで子供のように泣け叫び、

「あああああああああ!?!?!」

甲高い奇声を上げる今の彼女を、
いったい、誰があのアマンダ・アイズバルクだと信じるだろうか。

幽鬼の様にやせ細り、一体どれほど寝ていないのか……美しい顔には深いクマと薄いシワが刻まれ……かつて後宮に住まう誰もが羨んだ美しく艶やかな藍色の長い髪はいまや艶無く、精神的なものからか所々に白が混じりボサボサに乱れている。

「どうして、どうして、あんな、あんな、陛下、私は、わたしは……陛下を誰よりも、誰よりも……愛していたのに。ただ一目、この目で見ることでさえ出来れば私は……それで良かったのに……」

一瞬正気に戻り、美しい濃紺の瞳から涙を一筋零し、蹲ったアマ
ンダ。

その場に居た誰もが声を喪った。

後宮に住まう者ならば誰もが憎からず思っていた思いを、アマン
ダは言葉にする。

そして。

「どけっ、前を開けよ!!」

「陛下の御前である!!」

ドタドタと荒々しい音を立て衛兵を引き連れようやく現れた王を
目前に、アマンダは侍女たちが止める暇無く隠し持っていたナイフ
で命を絶った。

最後にニコリ、と王の顔を見、満足そうに儚く笑ったアマンダの
姿が酷く印象的だった。

第五話

齒車は歪む。^{ウシメイ}

少しづつ、少しづつ。しかし確実に。

必然か、偶然か。

後に大きな争いを生むこととなる異世界よりこの地に舞い降りた黒髪の少女、ユーコ・ミナガワの存在は、神の御業、とも思えるその存在価値の高さによって、武力国家とし君臨し続けたこの国のあり方を根本から砕き壊してしまうほど大きな影響力を持つこととなり、数多くの悲劇を生むこととなる――が。

今は誰もその事実を知らない。^{ミツメイ}

そして、現在。後宮にて愛に狂った女の悲しい葬式がただ静かに同族の者達により行われている頃。

ネヴァーランス国の首都アルモナから遠く離れた山間のある小さな村でその片鱗は静かに磨かれ、ゆっくりと研ぎ澄まされていた。

「養父さんっ！！――っ、ダンさん何をするんですか、止めてくださいー！！」

「出ていけっ、このただ飯ぐらいどもめ！！」

枝のようにやせ細った老人を殴る男が居た。

突然部屋に現れた男に老人と共に部屋に居た少年は一瞬、心底驚いたように口をポカンと開け、まるで信じられない光景を見たとかかりりに眼を大きく見開いていたが、その男がとったあまりにも理不尽な行動にハッとし、急いで二人の間にその小さな身を滑り込ませた。

「ロシュ…」

「養父さん!!」

弱弱しく少年を呼ぶ養父に慌ててロシュは駆け寄り息を呑んだ。

「養父さん――…」

「ゴホゴホツ、ロ、ロシュ…」

身を屈め、苦しげに咳を繰り返しては唇から少量の鮮血を吐きだす養父の、あまりにも弱弱しい姿にロシュは我知らずして身を震わした。

「どうして…。ダンさん、どうして貴方はこんなことを…」

どこか途方にくれた顔で直ぐ傍に立ち、ロシュたち親子を未だ変わらぬ睨んでくるかつては命の恩人であり、お互い頼れる仲間であった男を見遣った。

そう。

今日の前に居る者は、盗賊でも強盗でも無く、彼らの仲間だったはずだ。自然学者である養父と共に、この何も無い荒廃した大地に立ち向かった。

しかし、

「どうして? ええ? どうしてだ?! このペテン師野郎がっ!!」
「――っ、」

憤怒に染まった男の、その凄まじいまでの形相が、言葉が。
ロシュの考えを否定する。

「今まで土地の研究だ、研究だ、って、テメエラ親子は俺たちに貢がせるだけ貢がせて、いったい何をやったってんだ！？ああ？」

「な……」

「毎日毎日、畑の土をチツとばかり見ては俺たち村人に研究する振りを見させといてテメエラは毎日、毎日のん気に遊んでたんだろ？！俺たちがこんな土地でも必死に苦勞して耕して、やっと得られた少量ばかりの食料をも奪い取って！！」

「な……な、にを……貴方は！！いったい何をっ、」

「今更ごまかそうったってそうはいかないぜ？今日この国の首都からやってきたっていう“神の使徒”に聞いたんだよ。今こんな風に豊かな生活が送れるようになったのは神が俺達のために御遣いになられた黒髪の神子様の御蔭だとな。――それに比べてテメエラは何をした？毎日研究だ、研究だって言ってる割には何の成果も見せなかったじゃねえか！！」

「そ……んな、」

「ふん、ようやく大地が肥えてきたと思ったら。テメエラの成果じやなく他人様の成果だったとわな。人様の成果を横取りして楽しいか、ああ？」

「――」

「ふん、まあ良い。俺が今テメエラをボコボコにしくともこの話を聞いた奴らが^{シンジツ}大勢^{ニゲル}テメエラのところ^{ジュンビ}に押し寄せてくるだろうよ！せいぜい無駄な足掻きでもしてなっ！！」

現れるのも唐突だったが、去るのもまた唐突だった。
ボタン。

男が身を翻した途端、いきよい良く扉が大きな悲鳴を最後に口を閉じた。

「いったい… 何が…」

その場に残された少年はようやく過ぎ去ったあまりにも突然すぎた嵐に、腰が抜けたようにその場に倒れこんだ。

暫くの間、ボーと空を見ていた少年だったが自分の名を呼ぶ声にハッと身を起こした。

「ロシュ、」

「養父さん…あ、怪我は、」

「時間が無い。最低限の荷物を今すぐ纏めなさい。」

「え、いったい何を」

「早くしなさい！急がないと…」

先ほどの姿がまるで嘘のように年老いた体で素早くあちこちと動き回る養父。少年はその姿にただ啞然とし、養父に鞭を放り投げつけられるまでその場に座り込んでいた。

そして少年と老人は村を逃げるように去った。

同時期。

ネヴァーランス国の民の間でとある信仰が力を持つようになる。

それはジワジワと人々の間で広がり…

更なる歪みをこの国に生み出すこととなるが。

今は誰も知らない。
今は誰も気づかない。
今は誰も……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6200m/>

貴方と詠う鎮魂歌。

2011年4月13日17時35分発行